三國時代における「文學」の政治的宣揚

——六朝貴族制形成史の視點から——

渡邉義浩

はじめに
一　「名士」層の文化的諸價値
二　君主權力との對峙性
三　建安文學の興隆
おわりに

はじめに

三國時代より始まる魏晉南北朝時代は、世襲的に高官を獨占する貴族が社會の支配的階層を占めた時代として貴族制、あるいは貴族制社會の時代と規定されてきた。中國史上連綿と繼續する官僚制のなかで、魏晉南北朝を高官の世襲性の高かった一時代と捉える矢野主税・越智重明ら貴族の官僚としての側面を重視する論者に比して、同時代を貴族制社會と認識する川勝義雄・谷川道雄は、貴族を「豪族共同體」という社會の指導者として捉える、すなわち當該時代の社會を規定する存在と位置づける點において、社會の矛盾のなかから貴族制の形成を考察するという視角を有していた。(1)

「世界史の基本法則」を追求する戰後歷史學の動向とも深い關わりを持った後者の問題意識は、高く評價されるべきで

あろう。かかる意識を有するが故に、貴族制社會論は、國家の官僚である貴族の分析に際し、鄉里社會との關係を第一に置くという視座を持った。ことに川勝義雄の研究は、日本や西歐における封建制度との比較のなかで、換言すれば、領主制の視角から魏晉南北朝の貴族制を捉える問題意識が強かった。(2) しかし、一方で谷川道雄が強調するように、魏晉南北朝の貴族制は、日本や西歐の領主制の如く、鄉里社會における大土地所有をその根源的な存立基盤とはしていない。(3) こうした魏晉南北朝における貴族制の特徵を、領主制との關わりで捉えるために、川勝義雄・谷川道雄は、本來的に領主化傾向を有する豪族がそれを否定し、自己矛盾的な存在である「清流豪族」に轉化して、貴族制社會の形成主體になるという「清流豪族」論を展開し、それが主事する「豪族共同體」に中國史の特徵を見出したのである。(4)

ところで、魏晉南北朝の貴族層は、國家の興亡を超越して永續的に高官を輩出しえた。かかる事象は、貴族層が國家的權力から相對的に自立しうる據り所を有していたことを示す。「豪族共同體」論は、それを鄉里社會の「民の望」に求め、「清流豪族」への民衆の支持に貴族の自立性の存立基盤を措定した。しかし、後漢末以降の知識人層である「名士」層が、民衆の支持を直接的な存立基盤としなかったことは、すでに論じたとおりである。(5) それでは、のちに貴族層へ轉化する「名士」層の存立基盤はどこに求められるのか。結論的に言えば、「名士」層は、自己の有する文化的諸價値を存立基盤として、豪族層の支持を受け、また君主權力に尊重されて、國家機構に重要な役割を果たす存在であると思われる。從來、六朝貴族制の研究は、鄉里社會における貴族と民衆との直接的な關係の分析が中心であった。それを踏まえながらも、國家機構における君主權力と貴族、貴族と豪族の關係を、文化的諸價値という概念により分析することも有效なのではないか。(6) こうした問題意識から、本稿は、文化的諸價値を專有する「名士」層が、いかなる政治過程のなかで貴族制を形成していくのかという課題を、曹魏政權における「文學」の政治的宣揚に着目しながら考察するものである。

一　「名士」層の文化的諸價値

三國時代の知識人層は、貴族を國家の高官を世襲的に獨占するための社會的な再生産システムを所有する階層と定義するのであれば、未だ貴族としての要件を十全には滿たしていない。しかし、後漢末の黨錮の禁を契機として知識人層は、のちに貴族が存立基盤としていく國家權力を淵源としない自律的秩序を有することになった（註(5)所揭渡邉論文）。しかも、大土地所有という物質的基盤の多寡にその存立を左右されない點において、彼らは後漢時代の豪族層とも異質の存在である。したがって、崩壞した後漢「儒教國家」に代わり、自らを儒教的諸價値の體現者と位置づける後漢末から三國時代の知識人層を「名士」層と稱して論を進めることにしたい。註(5)所揭渡邉論文と一部重複するが、「名士」層と在地社會との關係を、荀彧とともに初期の曹操集團を支えた程昱を事例に確認することから始めよう。

程昱は兗州東郡東阿縣の出身である。東阿縣では、縣丞の王度が黃巾の亂に呼應したため縣令は逃亡し、「吏民」も渠丘山に逃れていった。程昱は、縣の「大姓」薛房らに策を開陳して縣城奪回を圖るが、『三國志』卷一四　程昱傳に、

（程）昱、縣中の大姓薛房らに謂いて曰く、……。房ら以て然りと爲すも、吏民は肯えて從わずして曰く、賊西に在れば、但だ東有るのみ、と。昱、房らに謂うに、愚民、事を計る可からず、と。

とあるように、「吏民」は賊からの逃亡だけを考え、程昱の策に從わなかった。この時、程昱が薛房らに言った「愚民、事を計る可からず」という語調には、程昱と「吏民」との距離感が如實に現れている。「名士」程昱は、「大姓」と記される豪族薛房らだけの支持により、やがて東阿縣を奪回した。その際、程昱が、「吏民」と表される在地社會の構成員のすべてから、輿論の支持を受けて在地社會を指導したのではないことに注目しておきたい。のちに東阿縣は曹操の支配下に入り、程昱もまた辟召を受けた。その際「鄉人」は、劉岱の辟召には疾と稱して屈しなかった程昱が、曹操の辟召には卽座に應ずることを「何ぞ前後の相背くや」と言って、批判的な輿論を形成した。しかし、この時にも程昱は、そうした

「郷人」の中傷に「笑って應」じなかったという(『三國志』巻一四　程昱傳)。「名士」程昱は、「郷人」と記される在地社會の構成員の輿論には規制されず、自己の主體的な判斷で曹操に出仕したのである。

ところが、このように「郷人」から乖離している程昱を、荀彧は東阿縣の「民の望」と稱している。張邈・陳宮の反亂に呂布が乘じて、曹操の據點が荀彧の守る鄄城のほか、東阿・范の二縣だけとなった時、『三國志』巻一四　程昱傳に、

(荀)彧、(程)昱に謂いて曰く、今兗州反し、唯だ此三城有つのみ。……君は民の望なり。歸りて之に說かば、殆ど可なり、と。昱乃ち歸る。……又兗州從事薛悌、昱と協謀し、卒に三城を完うし、以て太祖を待つ。

とあるように、荀彧は、「民の望」である程昱に、在地社會への規制力の發揮を依賴した。これに應えて程昱は、前出した東阿縣の「大姓」薛房の一族であろう兗州從事の薛悌と協力して、三城を守り通したのであった(7)。

ここで言われている「民の望」は、先述した程昱と在地社會との關係から考えて、川勝・谷川「豪族共同體」論が強調する民衆の輿論の支持を受けた指導者への呼稱ではない。程昱は、一族が兗州從事となるなど州府にも出仕していた縣の「大姓」薛氏以上の階層の支持を受ける「民の望」なのである(8)。このように「名士」層は、在地社會の卽自的支配者である豪族層の支持を受けることにより、在地社會に規制力を發揮する存在であった。したがって「名士」層は、在地社會の直接的な生產關係から乖離することが可能であり、かつ名聲の場を在地社會そのものに求める必要も無かったのである。「豪族共同體」論は、領主制の視角から貴族制を捉えるため、常に郷里社會との直接的な關係において貴族をめぐる郷論を檢討し、民衆の輿論の支持を貴族存立の必須な條件としている(註(4)所揭川勝・谷川論文)。ところが、「名士」程昱は、自己の名聲の場を、在地社會そのものとは別の、少なくとも豪族層以上が構成する場に求める存在なのである。むろん「名士」層が、豪族層に止まらず、在地社會のすべての構成員の支持を受ける場合もある。しかし、それは一方的な支持に過ぎず、「名士」層を存立させる必要條件ではないのである。

それでは君主は、なぜ「名士」層を必要とし、彼らを高官に就けたのであろうか。曹操を支えた荀彧を事例に、在地社

會との關係から考察しよう。荀彧は、豫州潁川郡潁陰縣の出身であるが、後漢末の混亂期における潁川の危險性を察知し、在地社會の「父老」に密縣の西山への避難を勸めた。しかし、「鄉人」が從わなかったため、荀彧は宗族だけを率いて冀州に移住した。「鄉人」は、のち戰亂に卷き込まれ多く殺害されたという（『後漢書』列傳六〇　荀彧傳）。程昱の事例同樣、ここにも川勝・谷川說の如き「民の望」的指導者としての「淸流豪族」の姿を見ることはできない。「名士」荀彧は、在地社會の「父老」や「鄉人」の意向よりも自己の判斷を優先させ、在地社會を棄てて宗族の安全を確保したのである。「名士」層が、在地社會の名聲だけを自己の存立基盤とはしていないことを確認できよう。

荀彧は、「名士」としての名聲の場をどこに求めたのであろうか。『後漢書』列傳六〇　荀彧傳に、

（荀）緄、宦官を畏憚し、乃ち彧の爲に中常侍唐衡の女を娶る。彧少くして才名有るを以ての故に譏議を免るるを得たり。南陽の何顒、人を知るに名あり、彧を見て之を異として曰く、王佐の才なり、と。

とあるように、荀彧は、宦官唐衡と婚姻關係を有したため、「名士」閒で「譏議」を受けかけている。『後漢書』では、「才名」により「譏議」を免れえたとしているが、宦官と「黨人」との對立關係が頂點に達していた後漢末期において、宦官と婚姻關係を有することは、荀彧の評價を下落させる大きな要因になったと思われる(9)。そうした荀彧の評價を一氣に高めた者が何顒であった。荀彧は、何顒に「王佐の才」と評價されることにより、「名士」としての名聲を確立しえたと考えてよい。つまり、何顒の「名士」グループが、「名士」荀彧の據り所となる名聲の場なのである。それでは、何顒とはいかなる人物であったのであろうか。

何顒は、荊州南陽郡襄鄉縣の出身で太學に遊學し、郭泰・賈彪の評價を受けて名聲を揚げ、陳蕃・李膺とも交際した。やがて、黨錮の禁に坐して亡命したが、至る所で「豪桀」と結び、「荊・豫の域」に名聲を有した。その閒、曹操を「天下を安ずる者」と評價し、荀彧を「王佐の器」と稱し、袁紹と「奔走の友」になったという。洛陽に潛入し袁紹と協力して「黨人」の救濟に努力したのち、黨錮が解除されると司空辟から董卓の長史になった。荀爽・王允とともに董卓の打倒

を謀るが失敗し、さらに鄭泰・种輯・伍瓊・荀攸らと董卓打倒を謀議したが、露顕して獄死した人物である（『後漢書』列傳五七　黨錮　何顒傳、『三國志』巻一〇　荀攸傳注引張璠『漢紀』）。

すなわち何顒は、政治への指向が強い「黨人」のなかでも、とくに現實政治へのアプローチが盛んで、「黨人」救出や董卓打倒を謀るなど、行動力に優れた「名士」であった。『三國志』巻六　袁紹傳注引『英雄記』によれば、袁紹の「奔走の友」は、何顒のほか張邈・吳子卿・許攸・伍瓊であったというから、何顒の周圍には、のちに軍閥の領袖となる袁紹・曹操・張邈、袁紹の謀臣となる許攸、何顒とともに董卓打倒を謀った伍瓊などがいたことになる。荀彧を評價し、「名士」に認定した何顒の「名士」グループは、こうした政治的指向の強い、實行力を備えた「名士」集團なのであった。また、荀彧と同樣、曹操が何顒グループの一員であったことにも注目したい。宦官の養子の子であった曹操は、「名士」層に參入する機會を窺っていたが、許劭から「目」を得るまでは「名士」層の一員となることができなかった(10)。その時期の曹操を評價した者は、許劭訪問を曹操に助言した橋玄と何顒だけであった。宦官と婚姻關係を有する荀彧や宦官の孫であった曹操を評價して「名士」グループに參入させた何顒は、宦官との關係への拘泥を越えて、人物を評價しうる能力を有していたのであろうか。

何顒により「名士」と認定された荀彧は、何顒と「奔走の友」であった袁紹に、弟の荀諶、同郡の辛評・郭圖とともに出仕した。しかし、郭圖らが袁紹の謀臣であり續けたことに對し(11)、やがて袁紹の才能に見切りをつけた荀彧は、舊知の閒柄であったであろう曹操に仕えることになった。曹操は、何顒グループで「王佐の才」と稱されていた荀彧の加入を「吾の子房」を得たと大いに喜んだ。ここで曹操が、荀彧を前漢劉邦の謀臣張良に擬えたことは、單なる典據以上の重要な意味を持つ。それは、荀彧が獻帝の擁立を獻策する時に、「曹操―獻帝」を「高祖―義帝」の關係に擬えているためである（『三國志』巻一〇　荀彧傳）。古來、荀彧を「漢の忠臣」とするか否かには議論がある。范曄の『後漢書』は、荀彧が漢王朝の矯正のため曹操に仕え、漢簒奪を目論む曹操により自殺に追い込まれたという『三國志』にはない記事を掲げ、「身

を殺して仁を成すの義」を貫いたという「論」を附して荀彧を高く評價する。また、丹羽兌子は、荀彧を漢臣ではないとしながら、曹操の覇業を押し進める行動と漢王朝を思う心情に救い難い矛盾を想定し、美川修一は、荀彧を漢臣とし、荀彧が漢王朝の存續を圖ったために曹操に殺害されたという立場をとる。(12) 荀彧は、建國の功臣を祭る魏の宗廟に「漢臣」の故を以て配祀されなかったように(『三國志』卷四　三少帝紀　正始五年の條裴松之注)、その立場が漢臣であったことは間違いない。しかし、荀彧にとって獻帝は、あくまでも曹操の「義帝」であった。荀彧は、袁紹勢力を分析する際も、官渡からの撤兵を抑止した時にも、當該時期の狀況を劉・項の抗爭における「劉邦」の位置に曹操を擬して獻策している(『三國志』卷一〇　荀彧傳)。曹操が「劉邦」である以上、その擁立する獻帝は「義帝」でしかなく、荀彧の立場は「漢の忠臣」とは言いがたい。荀彧が曹操の魏公就任に反對して「憂死」するのは、漢への忠誠心の發露ではなく、二で述べるように荀彧と曹操との協力關係が破綻した結果であると思われる。

それでは、兩者の協力關係が保持されていた時期において、「名士」荀彧が、曹操のために發揮しえた能力とは何か。その分析は、「名士」層が專有する文化的諸價値の一端を解明することになろう。曹操は、荀彧を建安八年に萬歲亭侯に封じた際、『三國志』卷一〇　荀彧傳注引『彧別傳』に、

> 太祖、(荀)彧に書を與えて曰く、君と事を共にして已來、朝廷に立ち、君の相に匡弼を爲し、君の相に舉人を爲し、君の相に建計を爲し、君の相に密謀を爲すこと、亦た以て多し。夫れ功は未だ必ずしも皆野戰ならず。願わくば君讓ること勿れ、と。

とあるように、荀彧の功績として次の四點を高く評價した。すなわち、①「匡弼」、政治全般の補佐である。荀彧がいかなる政治を推進したのかは、行論上二で檢討する。②「舉人」、人材登用である。これについても二で考察したい。③「建計」、將來を見据えた計畫の立案である。これは、曹操に大義名分を與えた獻帝の擁立が最大の功績となろう。④「密謀」、情報分析に基づく戰略・策略である。これは、曹操の生涯を賭けた對袁紹戰の戰略が最も重要であった。

曹操により①～④に分類された荀彧の功績は、『三國志』巻一〇、『後漢書』列傳六〇の荀彧傳の記述により、次のように具體化できる。(13) (1)兗州の確保。兗州を據點とする重要性の認識とその維持のための徐州勢力の分析。(2)獻帝擁立。「義帝」に擬えうる大義名分の獲得。(3)官渡以前の袁紹勢力の分析。(4)關中の安定。官渡の決戰前に、關中勢力の分裂を豫見し、鍾繇の重用による關中制壓を說く。(5)官渡の戰の重要性を強調。官渡からの撤兵を相談する曹操に、官渡で雌雄を決することを激勵。(6)袁紹勢力絕滅の優先。官渡での勝利の後、劉表攻擊を目指す曹操に、袁紹勢力を完全に滅ぼすことの優先を主張。(7)九州設置論の論破。冀州牧曹操の個人的な領土の擴大のため、古制である「九州の制」復活を圖る議論を阻止。(8)荊州討伐に進言。(9)人材登用。(10)董昭らによる曹操の魏公への進爵に反對。その結果としての死。

このうち曹操の分類の③・④に該當するものは、(1)～(6)・(8)となる。なかでも、曹操が荀彧の三公任命を求めた上奏文で、その功績として(5)・(6)を特記するように(『三國志』巻一〇　荀彧傳注引『彧別傳』)、荀彧の主たる功績は對袁紹戰の分析にあった。それでは荀彧はいかなる分析を行ったのか。荀彧は次の四點で曹操が袁紹に勝ると分析した。第一に「度」、袁紹は鷹揚に構えながら猜疑心が強く部下を疑うが、曹操は適材適所である。第二に「謀」、袁紹は優柔不斷で機會を逃すが、曹操は決斷力に富む。第三に「武」、袁紹は軍令を行き渡らせず兵力を使いこなせないが、曹操は信賞必罰で兵士が必死に戰う。第四に「德」、袁紹は名門を鼻にかけ敎養をひけらかし評判ばかりを氣にするが、曹操は質素に振る舞い功績を擧げた者には賞を惜しまない。この四點に優れる者が、天子を奉じて正義の戰いを起こすのであるから、敗れるわけがない(『三國志』巻一〇　荀彧傳)。荀彧は、こう分析して曹操を勵ましたのである。

曹操が袁紹を破った時、袁紹に內通する曹操の部下の手紙が多數發見されたように(『三國志』巻一　武帝紀)、荀彧のような分析は一般的なものではなかった。(14) 例えば、「名士」孔融は、袁紹側は領土も廣く兵力も強大で人材も揃っている。田豐と許攸は知謀の士で作戰面に當たり、審配・逢紀は盡忠の臣で內政の腕を振るい、顏良と文醜は百戰の勇者で軍を統率している。どう見ても勝ち目はない、と荀彧に語っている。これに對して荀彧は、逐一反駁し、その議論の豫見通り許

攸が降伏して、官渡の戰では曹操が勝利を收めたのである（『三國志』卷一〇　荀彧傳）。

袁紹に對する二人の「名士」の分析の相違は、荀彧と孔融の能力差という個人的な問題に還元すべきではない。そうした個人差を否定はしないが、兩者の分析が正反對となった本質的な理由は、彼らが「名士」として持ちえた情報量の差異に求められよう。荀彧は、何顒グループの一員として袁紹や許攸と舊知であったことに加え、袁紹政權に多く參加している潁川の「名士」層からの情報を入手しやすい立場にあった。同じく「名士」層であっても、袁紹と關係の薄い「北海グループ」に屬する孔融[15]は、袁紹勢力に關する表面的な情報しか持ちえなかったのではないか。かかる情報量の差が、兩者の分析を異ならせた主因であろう。曹操など皇帝權力の端緒たる軍閥が、多くの「名士」層を幕下に招致し、厚遇せざるをえなかった理由は、「名士」層の仲間社會が交友關係を通じて專有するこうした情報、およびそれに基づく狀況分析が、戰亂期において何よりも必要であったことに求められるのである。

かかる「名士」層の交友關係が有する實力を、獻帝の擁立からも考えていこう。荀彧が主唱した獻帝の擁立は、程昱が積極的に支持したものの、曹操幕下の諸將は消極的で、また董承の妨害もあって直ちには實現しなかった（『三國志』卷一　武帝紀）。それを實現させたものが鍾繇の盡力である（『三國志』卷一三　鍾繇傳）。荀氏と鍾氏とは、幾代にもわたる婚姻關係を有する潁川郡の「名士」仲間であり、荀彧が自己に代わりうる者として荀攸とともに鍾繇を擧げ、鍾繇が荀彧を「顏回」と評したように、荀彧と鍾繇も深い信賴關係で結ばれていた（『三國志』卷一〇　荀彧傳、荀彧傳注引『彧別傳』）。獻帝擁立は、荀氏と鍾氏という潁川の「名士」グループの交友關係を俟って、はじめて實現しえたのであった。因みにのちに九品官人法を獻策する陳羣が屬する潁川の陳氏も、兩氏と通婚關係を持つ潁川の「名士」グループの一員である。獻帝擁立という荀彧の功績は、こうした「名士」間の交友關係により達成されたのであった。

荀彧は、何顒グループや潁川グループといった「名士」層の仲間社會における交友關係により、分斷された亂世において的確な情報を入手し、それに基づく狀況判斷を行って、謀臣としての高い能力を發揮することができた。「名士」間で

は密接な關係を有しながら、「名士」層以外の者には閉鎖的で、地域的な限定をも持つ「名士」層の仲閒社會は、戰亂期に最も重要な情報を彼らの掌中に專有させたのである。したがって、皇帝權力の端緒である諸軍閥は、「名士」層を尊重し、その狀況分析に耳を傾けざるをえなかった。また、程昱の事例のように、豪族層の「名士」層への支持は、諸軍閥が在地社會への支配を安定させるために重要な役割を果たした。「名士」層が有するこのような價値は、軍事的政治的權力に基盤を置く諸軍閥や、經濟的側面に基盤を置く豪族層の價値に比して、文化的な側面が強い價値である。したがって、「名士」を「名士」たらしめる社會的諸機能を文化的諸價値と規定するのであれば、(16)この文化的諸價値の專有こそが、「名士」層の根本的な存立基盤となっていたのである。その有用性は、君主權力からの尊重を生み出したが、他方で「名士」層が有する仲閒社會の閉鎖性や、「黨人」から繼承する自己を儒敎的價値觀の體現者とする意識などは、次第に君主權力との對立を招くことになった。荀彧と曹操との關係をさらに檢討していこう。

二　君主權力との對峙性

曹操政權は、荀彧ら「名士」層の活躍もあり袁紹の打倒に成功した。しかし、袁紹勢力の消滅を分岐として、それまで隱蔽されていた君主權力と「名士」層との對峙性が表面化し、曹操の魏公就任への反對を機に、荀彧が殺害される。かかる兩者のせめぎあいを、政治理念・人事基準・魏公就任の三點から考察したい。

曹操は、荀彧の功績として①「匡弼」を擧げていた。荀彧の「匡弼」の具體的事例としては、國內の諸問題の議論・遠征中の曹操からの國政相談・家臣の上奏の仲介などが傳わっている。(17)まさに「軍國の事皆彧と籌る」(『三國志』卷一〇荀彧傳)という內政への參與である。それでは荀彧は、いかなる政治理念に基づいて內政を推進したのであろうか。『三國志』卷一〇　荀彧傳注引『彧別傳』に、

(荀)彧、嘗て太祖に言いて曰く、……宜しく天下の大才・通儒を集め、六經を考論し、傳記を刊定すべし。古今の

學を存立して、其の煩重を除き、以て聖眞を一にし、並びに禮學を隆んにし、漸く教化を敦くせば、則ち王道兩つながら濟る、と。彧從容として太祖と治道を論ずるに、此くの如きの類甚だ衆し。太祖常に之を嘉納す。

とあるように、荀彧は內政の要諦として、天下の大才・通儒を集め、六經を研究・校訂し、正しい注釋を決定して古今の學を存立させ、その間の重複を除去することを擧げている。魏としての儒教教義の確立である。そのうえで、禮學により教化を行えば、王道は文武ともに成就すると說くのである。かかる政治理念は、後漢「儒教國家」の崩壞に際し、「黨人」が掲げた儒教的價値觀に基づく政治理念に他ならない（註(4)所揭渡邊論文參照）。叔父に「黨人」の荀爽を持ち、同じく「黨人」の何顒に「王佐の才」と評價されて「名士」になった荀彧は、「黨人」の自律的秩序を繼承して形成された「名士」層の本流であった。したがって荀彧は、崩壞した後漢「儒教國家」に代わりうる理想の國家として曹魏政權を主體的に樹立し、自己の政治理念たる「儒教國家」再建實現を目指したのである。

これに對して曹操は、いかなる政治理念を有していたのか。曹操の政治手法は、しばしば法術主義と稱されている(18)。法整備のため建安十九年に新置した丞相理曹掾の高柔に下した「令」において曹操は、「夫れ治定の化は、禮を以て首と爲し、撥亂の政は、刑を以て先と爲す。」（『三國志』卷二四　高柔傳）と述べている。現在の混亂を治めるためには「刑」を優先すべきであるという刑罰・法律の重視に、曹操の政治理念を典型的に見ることができる。しかし曹操は、政權樹立の當初から、かかる法術主義を推進しえたわけではない。曹操は建安八年七月には、郡國に學官を設置して儒教を振興する「令」を發布している（『三國志』卷一　武帝紀）。その一方で、同年六月の「庚申令」では、「治平は德行を尙び、有事は功能を賞す。」（『三國志』卷一　武帝紀注引『魏書』）と述べ、高柔傳と同樣の法術主義に基づく政治の重要性を主張しているのである。儒教振興の布令と法術主義の布令とが、一月を經ずに相繼いで發布されるという政治理念のブレは重視すべきである。しかも、法術主義を小出しにした一カ月後に、取って附けたかのように儒教振興の布告を發布している有り樣には、當該時期の曹操政權における君主權力と「名士」層とのせめぎあいが反映している。曹操の法術主義は、すでに初平

年間にはその萌芽を窺いうるように、(19) 曹操が本來的に推進を目指す政治理念であった。しかし、袁氏の掃討が完了する建安十二年以前において、曹操は法術主義に基づく政治を全面的には遂行しえなかった。當該時期の曹操は、儒教の振興令を發布したり、荀彧の儒教的政治理念を「常に之を嘉納」したように、荀彧ら「名士」層が立脚理念とする儒教的價値觀とも妥協しながら、自己の政治理念を展開せざるをえなかったのである。曹操が法術主義を全面的に打ち出しえた時期は、前掲した高柔傳の法術主義「令」の發布時期と同様、「名士」層の指導者荀彧を殺害して魏公國を建設した後のことであった。それまで曹操は、「名士」層の儒教的政治理念をも併存させる妥協的な政治を行わざるをえなかったのである。

續いて、政治理念のせめぎあいとも關わりを持つ人事權、あるいは人事基準をめぐる曹操と「名士」層との關係を檢討しよう。曹操は、荀彧の功績として②「舉人」を掲げていた。『三國志』卷一〇　荀彧傳注引『彧別傳』に、

（荀彧の）前後舉ぐる所の者は、命世の大才なり。邴邑は則ち荀攸・鍾繇・陳羣、海內は則ち司馬宣王、及び當世の知名郗慮・華歆・王朗・荀悦・杜襲・辛毗・趙儼の儔を引致し、終に卿相と爲るもの、十數人を以てするなり。士を取るには一揆を以てせず、戲志才・郭嘉らは負俗の譏有り、杜畿は簡傲にして文少なきも、皆智策を以て之を舉げ、終に各々名を顯す。

とあるように、荀彧は、邴邑では①荀攸・②鍾繇・③陳羣、海內では④司馬懿、當時の知名の士としては⑤郗慮・⑥華歆・⑦王朗・⑧荀悦・⑨杜襲・⑩辛毗・⑪趙儼、さらには智策に優れる⑫戲志才・⑬郭嘉・⑭杜畿を推擧している。これ以外にも荀彧は、⑮仲長統・⑯孫資を推擧したことが史書に明記されている（『三國志』卷二一　劉劭傳注引『昌言』表・卷一四　劉放傳注引『資別傳』）。これら十六名のうち、④（河內郡出身、以下同）・⑤（高平）・⑥（平原）・⑦（東海）・⑭（京兆）・⑮（山陽）・⑯（太原）を除く、①～③・⑧～⑬の九名は、荀彧と同じ潁川郡の出身であり、荀彧が曹操政權に潁川グループの「名士」を積極的に加入させたことを看取できる。唐長孺は、こうした潁川出身者の多さの原因を、首都許縣

を含む潁川郡の支配の安定と、汝南・潁川両郡に本來的に多かった名士の推擧を曹操が荀彧に促した結果に求める。[20] 首肯しうる見解である。さらに潁川の九名に加えて、七名の他郡出身の「名士」を推擧していることは、「名士」荀彧が、何顒グループ・潁川グループに止まらない廣い交友關係を有していたことを示している。

それでは荀彧は、いかなる基準により人材を推擧したのであろうか。前掲『彧別傳』に「士を取るには一揆を以てせず」とあるように、荀彧の人物評價の基準は單一ではなかった。儒教的價値基準だけで自己を律した「黨人」に比して、戰亂期特有の軍事的有用性も必要とされた「名士」層は、名聲獲得のための行爲の價値基準が多様化していた。しかし、荀彧の察擧基準は、註(12)所揭丹羽論文が説くような、曹操と同質の法家主義的「唯才主義」ではない。「名士」荀彧の價値基準の根本が、儒教に存したことは政治理念と同様であり、それは荀彧が推擧した十六名のうち、儒教に關わる記載を持たない者が①・③・⑪～⑬の五名に過ぎないことから看取できる。あるいは、推擧の事例ではないが、後漢末の大儒鄭玄と「鄭・邴」と併稱され、「名士」層の支持を集めていた儒者邴原の厚遇を勸める進言からも(『三國志』卷一一 邴原傳)、荀彧の指向を窺いうる。荀彧の察擧は、儒教的價値を中核とする名聲を、「名士」層の仲間社會に有する者を察擧するという「名聲主義」に基づく登用であったと理解できるのである。[21]

これに對して曹操が人材登用の基準に「唯才主義」を掲げたことは周知のとおりである。[22] 『三國志』卷一 武帝紀に、

(建安)十五年春、令を下して曰く、……若し必ず廉士にして後用う可くんば、則ち齊桓は其れ何を以てか世に霸たる。今天下褐を被り玉を懷きて渭濱に釣る者有ること無きを得るか。又嫂を盜み金を受けて未だ無知に遇わざる者無きを得るか。二・三子、其れ我を佐けて仄陋を明揚せよ。唯だ才是れ擧げよ。吾得て之を用いん。

とあるように、曹操は、廉潔な人物ではなく陳平のように嫂と密通し賄賂を受け取る者であっても、「唯だ才」だけを基準として察擧を行うことを天下に宣言している。かかる「唯才主義」は、孝廉を典型とする漢代の鄕擧里選が依據した儒教的察擧基準の否定である。それと同時に、荀彧ら「名士」層の有する儒教的價値を中核とする「名聲主義」への挑戰と

受け取ることもできるのである。(23) こうした「唯才主義」は、曹操が魏種を許した際の、「唯だ其の才なり」という建安四年の發言に（『三國志』巻一　武帝紀）、すでに見ることができる。しかし、政治理念と同様、これを天下に宣布した時期はかなり遅い。曹操は、明確な形での「唯才主義」を三たび天下に布告しているが、それは①建安十五年（前掲史料）・②建安十九年・③建安二十二年であった。すべて袁氏掃討の完了した建安十二年以降の發布という點で法術主義の展開と共通するが、それぞれの前後における曹操と「名士」層との關係を考えると、三回にわたって「唯才主義」を布告した意義が浮かび上がってくるのである。

①の二年前である建安十三年には、「名士」層への最初の彈壓となった孔融の殺害が行われている。同年に敗退した赤壁の戰以降、「名士」層との對峙性を有する內政の整備を重視し始めた曹操が、反抗的な孔融を殺害するとともに、自己の人事基準を明確化するために發布したものが、第一回の「唯才主義」であったと理解できよう。②の二年前である建安十七年には、「名士」層の指導者荀彧を殺害し、十八年には魏公に就任して九州を設置した。後者は、荀彧の反對により、實現できなかった內政の懸案事項である。その成就の翌年に宣布した第二回の「唯才主義」は、曹操の人事基準の遵守を「名士」層に強要したものと言えよう。③の前年である建安二十一年には、曹操は魏王に就任したのち、「名士」崔琰を殺害し、それに不滿を持った毛玠を免黜している。第三回の「唯才主義」の布告は、「名士」層の「名聲主義」に基づく察擧に對する勝利宣言とも受け取りうる。そして、③の發布後の翌建安二十三年の吉本の亂、二十四年の魏諷の亂と立て續けに起こった漢復興の反亂を鎭壓し、魏諷の亂への連坐を言い立てて、荀彧の盟友であった「名士」鍾繇をも免官したのである。(24)

曹操は、察擧基準としての「唯才主義」を、「名士」層とのせめぎあいに勝利を納めるたびに發布して、反儒教を明確に主張した。それによって、「名士」層が專有している「名聲主義」による官吏登用や儒教的價値基準の偏重、仲間社會の排他性に對して、警告を發したのである。魏の君主により度々發せられた「阿黨比周」への批判や校事官の寵遇、ある

いは科法の尊重も、同様の文脈で理解することが可能であろう。(25)

かかる曹操と「名士」層との對峙性が、最も明瞭な形となって現れたものは、魏公就任から本格化する漢の簒奪への動きであった。「名士」層に衝撃を與えた最初の「名士」彈壓である孔融の殺害も、この問題と大きく關わっている。

孔融は、孔子の二十世孫で、李膺の評價を受け、陶丘洪・邊讓と並稱された後漢末期を代表する「名士」であり、北海太守として群雄の一人に數えられたこともあった。政治的・軍事的才能の乏しさから、やがて曹操に身を寄せたが、魏臣にはならず、漢臣として獻帝の傍らにあった。曹操と孔融の根本的な對立點は曹操による漢の簒奪にあったが、袁熙の妻甄氏を曹丕が娶ったことへの皮肉、烏桓討伐の嘲笑、禁酒令の侮蔑などその爭點は多岐に亘った。したがって、孔融賜死の彈劾文も、孔融が孫權の使者に曹操を誹謗したことに加えて、親への不孝、漢への不忠を揭げて孔融を攻擊し、兩者の對立點を暈している。ことに漢への不忠は、天下を保つ者は卯金刀（劉）とは限るまいと孔融が發言したとされており、漢の簒奪をめぐる曹操と孔融との軋轢を隱蔽する役割を果たしている（『後漢書』列傳六〇　孔融傳）。

孔融が彈劾文の如き發言をしたか否かは確かめようもないが、平素の孔融は、漢の少府として、同じく漢の尙書令であった荀彧や黃門侍郎の荀悅と、獻帝を圍んで談笑していたと傳えられる（『後漢書』列傳五二　荀淑傳附荀悅傳）。本傳も曹操が次第に詐術を現してきたため、あえて過激な發言をしたと孔融を辯護するように（『後漢書』列傳六〇　孔融傳）、孔融の立場は漢の擁護にあった。また、孔融の交友關係は、『三國志』・『後漢書』に明記されるものだけでも二十六名に及び、(26)そのなかには曹操の敵對勢力に屬する「名士」も少なくなかった。「名士」孔融が有するかかる社會的影響力と自己への反抗性に脅威を覺えた曹操は、君主權力の確立を目指して孔融を殺害した。すなわち、孔融殺害の眞の理由は、彈劾文の內容にはなく、孔融と獻帝との親密性、およびその交友關係の廣さに曹操が危險性を感じたことに求めうるのである。曹操の舊臣ではない賈詡が、謀臣として重用される危險性を鑑み、門を閉じて私的交際をせず、他の「名士」層と婚姻關係を持たないことにより、曹操からの彈壓を逃れようとしたことは（『三國志』卷一〇　賈詡傳）、「名士」層が幅廣い交友關

係を私的に結ぶことの危険性を端的に表している。他方、曹操もまた、多くの「名士」層との交友關係を誇る孔融の殺害により、「名士」閒に動搖が起こることをできる限り回避しようとした。それが、孔融の惡行を儒教的理念により指彈した彈劾文として現れているのであろう。

荀彧の殺害は、孔融に況して危險性が高かった。それは、潁川グループを中心とする荀彧自身の交友關係に加えて、從子荀攸が曹操の謀主となり、三兄荀衍が監軍校尉・守鄴・都督河北事であったという軍事的な問題、さらには長子荀惲が曹操の安陽公主を娶るほか、陳氏・鍾氏・司馬氏と結ばれた婚姻關係により、荀彧が支えられていたからである(27)。しかし、曹操と荀彧との對立は決定的であった。一で述べたように、荀彧は「漢の忠臣」とは言いがたい。ところが、自己の抱負であった新たなる「儒教國家」の再建が、曹操の諸政策では不可能であることが次第に明らかになるにつれ、荀彧は漢の擁護に轉じていった。董昭らが曹操の魏公への進爵を相談した時、『三國志』卷一〇　荀彧傳に、

（荀）彧以爲えらく、太祖は本と義兵を興し、以て朝を匡し國を寧んじ、忠貞の誠を秉り、退讓の實を守るなり。君子は人を愛すに德を以てす、宜しく此の如かるべからず。

とあるように、荀彧は、「義」・「忠貞」・「德」といった儒教的德目を列擧して、換言すれば、「名士」層が專有する儒教的價値基準を掲げて反對したのである。かかる荀彧の抵抗は、個人的瑕疵が多かった孔融の抵抗とは質を異にする。すなわち、荀彧は「名士」層の存立基盤、彼らの價値基準を賭けて曹操の行動を妨げようとしたのである。曹操が、漢の簒奪は元より、自己の君主權の確立や人事基準の「唯才主義」による統一、政治理念における法術主義の實現を行うためには、荀彧が押立てる「名士」層の文化的諸價値を粉碎する必要があった。しかし、荀彧を殺害することは、「名士」層の存立を脅かすことになり、「名士」層からの反發は必至である。そのため曹操は、漢臣の荀彧を自己の軍の監視下で殺害するという周到ぶりを示し（註(12)所揭美川論文）、「名士」層の反抗を軍事力で押さえ込んだのであった。

軍事力という君主權力の切り札によって荀彧を殺害した曹操は、「名士」層のとりあえずの服從を獲得した。しかし、

九錫勸進文の筆頭となった荀攸は荀彧殺害の翌年に卒し、潁川グループの次代のリーダーである陳羣、あるいは司馬懿など荀彧の推擧を受けた「名士」層の動向は不安定であった。[28] しかも、蜀漢・孫吳政權という敵對國と對峙する曹操政權において、國力の低下を招く「名士」層への武力彈壓を繰り返すことは不可能である。こうした狀況をある程度まで豫測しえたであろう曹操は、荀彧の殺害以前から、儒敎的價値の優越性を梃子に文化的諸價値を專有する「名士」層に對抗して、新たな文化的價値の創出を試みていた。それが「文學」である。[29]

三　建安文學の興隆

建安詩は「青年の文學」である、と鈴木修次は言う。[30] 詩題を敏感に捉える感覺、激情の迸る抒情、技巧で飾り立てない五言の奔放なリズムによる表現のいずれもが、新しい時期の新しい創造を求める青年のそれに相應しいための謂である。鈴木によれば、建安文學は、詩人のサークル活動の開始・五言詩の創設・氣質を體となした所に特徵がある。建安文學の萠芽は「南皮の遊」にあるが、その制度化は、建安十六年に曹丕が五官中郎將となり、五官將文學の設置された時點に求めうる。しかし、建安二十四年には「建安の七子」のすべてが卒し、建安文學は足掛け七年の活動期を持つに過ぎない。その構成員としては、曹操・曹丕・曹植の「三曹」を中心に、「建安の七子」と稱される孔融・陳琳・王粲・徐幹・阮瑀・應瑒・劉楨、さらには路粹・繁欽・邯鄲淳・楊脩・丁儀・丁廙・荀緯・吳質を擧げることができる。ただし、「七子」のうち孔融の活動時期は早く、蔡邕とともに建安文學に影響を與えた先驅者と位置づけられるという。[31]

かかる建安文學を主導した者は、曹操であった。井波律子は、曹操の文學を天命不信の心的態度に基づく、樂府體を中心とした卽興的要素の強いもので、人生有限という漢代までの宿命觀を否定し、超克するものであると捉えている。[32] また竹田晃は、曹操の自由・闊達さが建安文學の獨自性を生み、亂世に生きる人閒の苦しみを歌う詩には、底邊に生きる犧牲者に心を配る纖細さが表れ、神仙への憧れを歌う詩には、理想の世界と苦惱の現實を搖れ動くデリケートな心情が存す

るという。[33] それでは曹操が、個人的嗜好として文學を愛好するだけでなく、五官將文學を設置するなどの制度化を行ってまで、「文學」を宣揚する必要性はどこにあるのか。

岡村繁は、それを曹操の出自の卑しさに求める。[34] すなわち、卑しい出自の曹魏の君主は、貴族官僚を麾下に最高權力者として君臨するために、貴族の本來的資質としての學問・文學に卓越する必要があった。そのため曹操は、貴族文學に迎合したとするのである。しかし、吉川幸次郎が、曹操は「かたぎの家」の出身ではない（宦官系の豪族出身、渡邊補、以下同）[35]ため、從來の「とりすました文化」（後漢時代の儒教を中心とする文化）から制約を受けなかったと説くように、岡村のいう「貴族官僚」の文化の中心は、儒教であって文學ではない。曹操は「貴族文化」に迎合したのではなく、その制約を打ち破ろうとしたのである。

二で述べたように、曹操と「名士」層とは、政治理念・魏公就任・人事基準の三點をめぐって、對峙性を有していた。第一の政治理念に關しては、「名士」層の尊重する儒教的な政治に對して、法術的政治が遂行された。[36] 別稿で論じたように、後漢「儒教國家」の支配が、「寬治」と稱すべき豪族の規制力を利用した支配であるとすれば、曹操の展開した屯田制は、豪族の在地社會への規制力に對抗するために、君主權力の基盤となる一般農民を保護するものであった。[37] 君主權の強化を目的とする法術的政治は、法家思想の宣揚だけではなく、實際の政策面においても着實に推進されていたのである。ゆえに、政治理念に關する「名士」層との對峙性は、曹操に有利な形で解消しつつあったと言えよう。

第二の曹操の魏公就任は、荀彧の殺害を機に實現した。その後も、吉本の亂や魏諷の亂といった反魏勢力の炙りだしと打破が進行していく。むろん、こうした動向に批判的な「名士」層との對立が解消した譯ではないが、武力による彈壓を被る危險性が高いその對立は伏流化し、殘る第三の對峙點に兩者の對抗關係が集中的に現れることになった。

第三の對峙點である「名士」層の「名聲主義」と曹操の「唯才主義」という人事基準の抗爭をめぐり、曹操は荀彧・崔琰を殺害して「名聲主義」に打擊を與えたが、それを完全に一掃することはできなかった。親不孝でも有能な者を尊重す

るという「唯才主義」は、親孝行で有能な者を親不孝で有能な者よりも貶めることが論理的に不可能である。すなわち「唯才主義」という價値基準は、「名聲主義」には十全に對抗しえなかったのである。端的に言えば、才能があるという「名聲」に基づき人材を登用すれば、それは「名聲主義」による擧用となってしまうわけで、曹操は、その「名聲」を得るための價値基準そのものを創設する必要があった。「名士」層が掲げる「名聲主義」の中核的な價値基準は、「黨人」以來の儒教的價値基準である。それに對抗するためには、「才能」という範疇の廣い概念ではなく、限定的な、しかも曹操が主觀的に判斷できる文化價値でなければならない。曹操は、文學・兵法・儒教・音樂に優れた才能を有するほか(『三國志』卷一　武帝紀)、草書・圍碁が得意で、養生の法を好み藥や處方に詳しかったという(『三國志』卷一　武帝紀注引『博物志』)。曹操は、これらの自己の能力の中から、「名士」層へ對抗しうる文化價値として、「文學」を選擇したのであった。

曹魏政權における「文學」の興隆は、曹操による國家的宣揚・制度化による公認・文學を語る言語の發達に起因する。時代背景を同じくしながら、蜀漢・孫吳政權下において「文學」が不振であったことは、曹操が主體的に「文學」を宣揚したことを傍證する(38)。具體的には、曹操の文學者厚遇・曹丕の『典論』執筆が國家的宣揚にあたり(39)、五官將文學など文學を冠する官職の創設は文學の制度化を意味する。曹丕の「吳質に與える書」から本格的に開始される文學評論は、文學を語る獨自の言語の創設となった(40)。かかる「文學」の興隆は、建安十六年に五官將文學が設置されたころから本格化した。翌年の荀彧殺害により「名士」層に打擊を與える曹操が、「文學」の宣揚により「名士」層の文化價値の動搖を企圖したためである。しかし、「文學」が新たな文化價値として、「名士」層の儒教的價値に優越するためには、サロンにおいて文學作品を著すだけでは不十分である。「文學」的價値を基準とした人事が行われてこそ、「文學」は國家における新たな價値基準となりうる。その推進を目指した者が、丁儀であった。

丁儀・丁廙の兄弟は、沛國の出身で父丁沖が曹操と故舊であったため、曹操から寵遇された。曹操は、丁儀の有能さを

聞き、召しだす以前に娘を娶らすことを曹丕に相談した。曹丕の反對によりそれは闇沙汰となったが、丁儀と話をしたのち曹操は、曹丕が自分を誤らせたと言ったほどの傾倒ぶりをみせた。一方、丁儀は、曹丕の反對で駙馬になれなかったことを恨み、丁廙とともに曹植に接近してその股肱となり、楊脩と羽翼になって曹植の立太子を畫策した(『三國志』卷一九 陳思王傳注引『魏略』)。曹操の寵愛を背景に、丁儀は、『三國志』卷一二 徐奕傳注引『傅子』に、「武皇帝、至明なり。崔琰・徐奕は一時の清賢、皆忠信を以て魏朝に顯る。丁儀之を閒て、徐奕位を失い、崔琰誅せらる。」とあるように、崔琰・徐奕を殺害・失脚させている。このほか丁儀は、毛玠を失脚させ、何夔と對立し(『三國志』卷一二 何夔傳注引『魏書』)、また邢顒とも敵對した(『三國志』卷一二 邢顒傳)。萬繩楠は、こうした丁儀と崔琰らとの對立を、曹操の基盤である「譙沛集團」と世族地主集團の「汝潁集團」との抗爭として捉えている(41)。たしかに丁儀は、曹操の擧兵を個人的に支援した衞茲の子衞臻を、自己の仲閒に入れることを圖っており(『三國志』卷一二 衞臻傳)、彼らの屬性に曹操との個人的な結合關係があることは認められる。しかし、兩者の對立は、地緣・血緣や集團同士の抗爭という視角だけでは捉えがたい規則性を持つ。それは、崔琰・毛玠・徐奕・何夔・邢顒という『三國志』から揭げうる限りの丁儀との對立者が、すべて丞相東曹掾に就いているという規則性である。この規則性に、丁儀が丞相西曹掾であったこと(『三國志』卷二二 桓階傳)と、「贈丁儀」といった曹植の文學作品が殘存すること(『文選』卷二四 贈答二)を考え併せれば、兩者の抗爭は、曹操の「文學」宣揚を背景に「文學」的價値基準を揭げる丞相西曹掾の人事權と、儒敎的價値基準を揭げる「名士」層が掌握する丞相東曹掾の人事權との抗爭として理解できるのである。しかし、この抗爭は意外な方向から決着をみた。建安二十二年、曹丕の立太子である。

曹操は、二十五人の男子のなかで最も期待した天才兒曹沖が建安十三年に十三歲で夭折し、嫡出子の曹丕・曹植に候補が絞られてからも、後繼者を決定することが遲かった。その理由は、建安十五年に銅爵臺が完成してすべての男子に賦を作らせた際、曹植が見せた文學的才能に魅力を感じたことに求められよう(42)。同年は、「名士」層の儒敎的價値基準に對抗す

べき「唯才主義」を掲げた第一回の求才令を發布した年であった。儒教に代わる文化價値を模索していた曹操にとって、曹植の文學的才能は得難いものであった。むろん曹丕に、文學的才能が乏しかったわけではなく、建安十六年に任命された五官中郎將・副丞相の屬官には五官將文學が設けられた。しかし曹操は、曹丕・曹植がともに屬官にすることを願った邯鄲淳を曹植に與えたように(『三國志』卷二一　王粲傳注引『魏略』)、曹植の文學的才能をより高く評價していた。『三國志』卷一九　陳思王傳に、「(曹)植既に才を以て異とせられ、丁儀・丁廙・楊脩ら之が羽翼と爲る。太祖狐疑し、幾ど太子と爲さんとすること數しばなり。」とあるように、曹操は豐かな文學的才能を有する曹植を寵愛し、曹植を後繼者に擬することもしばしばであった。しかし曹操は、結局後繼者に曹丕を選んだ。それは、『三國志』卷一九　陳思王傳に記される曹植の大まかな性格や飲酒、馳道の車行などだけが理由ではあるまい。後繼者の決定には、兩者の支持勢力に對する曹操の政治的な判斷が優先されたと考えられる。

立太子をめぐる抗爭において曹植を支持した者は、曹植の「羽翼」で文學仲閒でもあった丁儀・丁廙・楊脩のほか、文學的才能を曹植に見込まれた邯鄲淳、曹操の曹植への寵愛に迎合した「佞幸」の孔桂であった(『三國志』卷二一　王粲傳注引『魏略』、卷三　明帝紀注引『魏略』)。曹丕の親友夏侯尚と不和で曹植寄りに位置した荀惲、兩者の才能をともに讚えながら曹植の方がなお優れていると曹操に言上した楊俊は、ともにのち曹丕に恨まれており、曹植側の人物と考えてもよい(『三國志』卷一〇　荀彧傳附荀惲傳、卷二三　楊俊傳)。しかし、曹植の立太子を積極的に曹操に勸めた丁儀・丁廙・楊脩・邯鄲淳が、いずれも「文學」を第一の價値基準として尊重する人物であることに對して、荀惲・楊俊は儒教的價値基準を持つ「名士」層の出身であった。そして、荀惲・楊俊の曹植擁立のための積極的動向が傳わらないように、「名士」層の多くは曹丕を支持していた(43)。なかでも、『三國志』卷一二　崔琰傳に、

時に未だ太子を立てず、臨菑侯植才有りて愛せらる。太祖狐疑し、函を以て密かに外に訪ねしむ。唯だ(崔)琰のみ露板もて答えて曰く、蓋し聞く、春秋の義は子を立つるに長を以てす、と。加うるに五官將は仁孝・聰明たり、宜し

く正統を承ぐべし。琰死を以て之を守らん、と。植は琰の兄の女婿なり。

とある崔琰は、曹植が兄の娘婿であるにも拘らず、「春秋の義」を押立てて曹丕の立太子を堂々と要求した。このほか、曹操から後継者問題の諮問を受けた「名士」層の賈詡・毛玠・邢顒・桓階は、すべて曹丕を後継者とすべきことを主張している(『三國志』巻一〇　賈詡傳、巻一二　毛玠傳・邢顒傳、巻二二　桓階傳)。かれら「名士」層が曹丕の立太子を主張した理由は、「單家」出身の吳質が曹丕の「股肱」となって、自己の立身を圖ったこと(『三國志』巻二一　王粲傳注引『魏略』)とは異なる。曹植の支持者は文學者集團であった。その價値基準と曹操の寵愛を背景に、丁儀は崔琰・毛玠・邢顒らを攻撃し、丁儀から毛玠・徐奕を守ろうとした者が桓階であった。とすれば、彼らが曹操の曹植寵愛に迎合せず、曹丕の立太子を主張した理由は、保身や立身を越えて、崔琰がその論據とした儒教的價値そのものを擁護することにあったと考えられる。つまり「名士」層は、「文學」という新しい文化價値に對抗して、自己の儒教的價値を保全するために、曹丕を支持したのである。

曹操は、こうした「名士」層の動向に對して、あくまでも自己の價値基準を貫き、儒教的價値を粉碎して「文學」を宣揚し續け、曹植を太子に立てることも可能であった。その選擇肢の魅力が、果斷な曹操の後繼者決定を遲らせた主因であろう。事實、建安二十二年十二月の立太子を前に、二十一年には崔琰を殺害、二十二年六月には第三回の「唯才主義」を發布して、「名士」層との對峙性を鮮明にしている。しかし曹操は、儒教を紐帶とする「名士」層の結束力を崩しきることができなかった。曹丕の立太子後、曹丕を支えた論功により高官となった吳質は、曹丕の股肱として寵愛され、また文學的才能に優れていたにも拘らず、鄉里の濟陰郡から「士名」を得られなかった(『三國志』巻二一　王粲傳注引『魏略』)。「文學」という新たな價値基準による名聲の創出に對する「名士」層の激しい反發と結束を見ることができよう(44)。また曹操は、曹植の行動とその支持勢力にも不安を抱いていた。ことに楊脩には、その才覺と袁術の甥という婚姻關係、四世三公を稱された後漢屈指の名族という出自に嫌惡感を抱き、早い段階からその殺害を考えていた(『後漢書』列傳四四　楊震傳附楊脩傳)。

さらに蜀漢・孫呉政権の存在は、曹操に立太子問題におけるこれ以上の猶豫を與えなかった。こうして曹操は、「文學」の宣揚による新たな價値基準の創設を斷念するとともに曹丕を後繼者に定め、その後幾許もなく死去したのである。

こうした狀況下で卽位した曹丕は、必要以上に「文學」を尊重できなかった。曹丕の立太子の際、曹操に殺された楊脩に續いて、曹丕は卽位直後に丁儀・丁廙を殺害した（『三國志』卷一九　陳思王傳）。政敵とはいえ、立て續けの文學者の殺害は、曹魏政權による「文學」の宣揚が終焉したことを象徴する。立太子直後に書かれたと言われる『典論』において、曹丕が「文學」を政治に優越する第一の價値と言い切れなかった齒切れの惡さは、「文學」を愛好しながら尊重しきれない曹丕の微妙な位置を如實に現している。(45) さらに曹丕は、漢を簒奪して魏を建國する際、儒教思想に基づく禪讓を行った。(46) 自己の帝位の正當性を儒教に求めた曹丕の詔は、こののち「唯才主義」や「文學」の重要性を一切說かず、儒教の宣揚を繰り返すことになる。曹魏政權における「文學」の興隆は、こうして幕を閉じた。曹丕・曹植の立太子爭いと「文學」・儒教の價値基準爭いがリンクしたうえ、「名士」層の結束が固かったこともあって、「文學」は儒教を越えられなかったのである。

それでは、儒教に回歸した曹丕のもと、皇帝權力と「名士」層の人事權をめぐるせめぎあいは、いかなる決着を見たのであろうか。この時期に、陳羣の獻策に基づいて九品官人法が制定されたことは周知のとおりである。九品官人法をめぐる問題點は多岐にわたるので、(47) 本稿では皇帝權力と「名士」層との人事權をめぐるせめぎあいと、人事の際の價値基準という二點に問題を限定して考察することにしたい。

九品官人法に關する最初の批判となった夏侯玄の議論は、『三國志』卷九　夏侯玄傳に、

> 夫れ才を官し人を用いるは、國の柄なり。故に銓衡をば臺閣に專するは、上の分なり。孝行は閭巷に存し、優劣をば之を鄕人に任ずるは、下の敍なり。夫れ淸敎・審選を欲するは、其の分敍を明らかにし、相涉らしめざるに在るのみ。何となれば、上其の分を過ぎれば、則ち由る所の本づかずして、干勢馳騖の路の開かるるを恐れ、下其の敍を踰

えれば、則ち天爵の外通し、機權の門多きを恐るればなり。夫れ天爵下通するは、是れ庶人柄を議するなり。機權門に多きは、是れ紛亂の原なり。州郡の中正度を品し才を官してよりこのかた年載有り、緬緬紛紛として未だ整齊を聞かざるは、豈に分紱參錯し、各々其の要の由る所を失いしに非ずや。

とある。すなわち夏侯玄は、九品官人法により君主のみが保有すべき人事權が「下」と記される郡中正に移行したことを批判している。(48) 行論との關わりで言えば、九品官人法により、「名士」層の人事權に對する發言力が高まったことへの牽制であると考えてよい。『晉書』卷四五 劉毅傳にも、九品官人法は「人主の威福を操り、天朝の權柄を奪」うものであると批判されている。九品官人法の獻策者である陳羣は、潁川郡の出身で、幼少の頃から「黨人」の祖父陳寔の薫陶を受け、孔融に將來を囑望されて、荀彧の娘を娶った「名士」層の本流であった(『三國志』卷二二 陳羣傳)。したがって、九品官人法は、名聲で表現される「名士」層の自律的秩序、すなわち「名聲主義」に基づく察擧基準を、「鄉品」という形で國家が承認して權威づけるという側面を有している。皇帝權力の代辯者的立場にある夏侯玄は、それを人事權の下への移行であると非難したのである。むろん、九品官人法は、鄉擧里選に比べて、中央から中正官を派遣するため中央集權的であり、鄉品と官品を連動させることにより、在地社會における人物評價を國家の基準に收斂するという君主權強化の側面をも有している。こうした意味において、九品官人法は、曹操と荀彧から始まった君主權力と「名士」層との人事權をめぐるせめぎあいの妥協のなかから生まれた官吏登用制度として理解できるのである。(49)

續けて夏侯玄は、九品官人法の人事基準が「孝行」・「仁恕」・「義斷」であることを論じているが、これについては批判をしていない(『三國志』卷九 夏侯玄傳)。これらの德目が儒教的價値であることは言を俟たない。すなわち、九品官人法の人事基準は、「唯才主義」でも「文學」にでもなく、儒教に置かれているのである。(50) かかる人事基準が、魏晉南北朝を通して維持されたことは、九品官人法において鄉品を貶められた事例が、すべて家族に關わる倫理道德を中心とする儒教的價値基準に基づく貶議であることからも理解できる。(51) 唐代の科擧で「文學」が尊重されたような價値基準の多様性

は、(52) 九品官人法には見られない。それは、儒教的價値を中心とする「名士」層の自律的秩序が、魏晉南北朝の貴族制に繼承されたことを裏付ける。貴族の再生産を制度的に保證した九品官人法において、貴族制を存立させる文化的諸價値の根底に置かれたものは、儒教なのであった。それは、曹魏政權下における「名士」層の價値基準と、君主權力の宣揚する價値基準との抗爭において、「名士」的價値基準が最終的な勝利を收めたことを意味するのである。「名士」層およびその後繼者である貴族層は、儒教を中核とする文化的諸價値の專有を存立基盤としていたのである。

おわりに

後漢末から三國時代の知識人層である「名士」層は、文化的諸價値を專有することにより、當該時代に優越した地位を有していた。「名士」層の專有する文化的諸價値のうち、仲閒社會を利用した情報收集能力、情報收集分析に基づく政治能力、豪族の支持を集めて政權を安定させる能力は、君主權力による彼らの優遇をもたらした。しかし、「名士」層が有する閉鎖的な仲閒社會と、それを作りだす人物評價、そしてその根本に存在する儒教的價値基準の專有は、君主權力との對立を招いた。曹操が袁紹という強敵を抱え、「名士」層の協力を無條件に必要とした時期には、兩者の目的は合致して、密接な協力關係が續いた。曹操は荀彧の「劉邦」であり、荀彧は曹操の「張良」であった。しかし、袁紹勢力の打倒を契機として、曹操が君主權力の確立を目指し、法術主義の遂行や人事權の收斂、「文學」の宣揚による儒教的價値基準への對抗を行うと、「名士」層の代表者である荀彧と曹操との對立は激化していった。それを決定づけ、兩者の破局を招いたものが曹操の魏公就任であった。

曹操は、舊來の價値觀の中心にあった後漢「儒教國家」が崩壞したのちに、新たな文化的價値基準として「文學」を創出して、國家的宣揚と五官將文學の設置などによる制度化を行い、新文化を語る言語としての文學評論を成立させた。「文學」は、儒教に比して主觀的な要素の強い文化價値である。したがって、それは儒教的價値を中核とする名聲を文化的價

値基準に仲間社會を形成していた「名士」層に對する新たな價値基準として有效であった。しかし、曹丕の寵愛する「文學者」の吳質が「士名」を得られなかったように、「名士」層の仲間社會は強固で排他的であった。加えて、文學的才能に恵まれた曹植との立太子爭いのなかで、曹丕が次第に儒教的價値の尊重に回歸し、儒教理念に基づく禪讓を行ったことは、「文學」に對する儒教の優越を決定づけた。ゆえに、漢魏交替期に設けられた九品官人法においては、儒教的價値が人材登用の價値基準として採用された。やがて、州大中正の設置をめぐる抗爭を經て、「名士」層を主體とした仲間社會が、儒教的價値を根底に据える貴族制を形成していくと考えているが、この問題については稿を改めて論ずることにしたい。

註

(1) 矢野主稅『門閥社會成立史』(國書刊行會　一九七六年)。越智重明『魏晉南朝の貴族制』(研文出版　一九八二年)、『魏晉南朝の人と社會』(研文出版　一九八五年)。川勝義雄『六朝貴族制社會の研究』(岩波書店　一九八二年)。谷川道雄『中國中世社會と共同體』(國書刊行會　一九七六年)などの諸研究を參照。なお、中村圭爾「六朝貴族制論」(『戰後日本の中國史論爭』河合文化教育研究所　一九九三年)は、川勝・矢野の論爭を軸に貴族制研究を總括している。

(2) 川勝義雄『六朝貴族制社會の研究』(前揭)「はしがき」は、「私の關心の底に、つねに離れることのない問題が一貫して存在した……それは、つまるところ貴族制社會と封建社會との關係をどう考えればよいのか、という問題になるだろう。」と述べている。

(3) 谷川道雄「中國史研究の新しい課題――封建制の再評價問題にふれて――」(『日本史研究』九四　一九六七年、『中國中世社會と共同體』前揭　所收)は、「大土地所有と小農經營とは、原理的に排他的な關係に立ち、歷代のいわゆる兼併問題をひきおこすのである。つまり大土地所有は、鄉村の統率者の資格をもたないのである」と述べている。

(4) 川勝義雄・谷川道雄「中國中世史研究における立場と方法」(『中國中世史研究――六朝隋唐の社會と文化――』東海大學出版會　一九七〇年、川勝義雄『中國人の歷史意識』平凡社　一九八六年　所收)。かかる「豪族共同體」論に對する批判としては、渡邉義浩「後漢時代の黨錮について」(『史峯』六　一九九一年、『後漢國家の支配と儒教』雄山閣出版　一九九五年に改題・補訂のうえ所收)を參照。

(5) 渡邉義浩「漢魏交替期の社會」(『歷史學研究』六二六　一九九一年)。

(6) 宮崎市定『九品官人法の研究――科擧前史――』(東洋史研究會　一九五六年、『宮崎市定全集』6　九品官人法　岩

波書店　一九九二年に再錄）「第三編　餘論——再び漢より唐へ——」は、「三國から唐に至る中國の社會は、大體において貴族制度の時代と名附けることができる。……寧ろ本質的には封建制が出現すべき社會であったものが、君主權の嚴存によって貴族制という特殊な形態を採ったと考える方が眞相に近いかも知れない。」と述べ、六朝貴族制研究における君主權力と貴族との關係の分析の重要性を指摘している。

(7)　程昱は、こののち東中郎將・領濟陰太守・都督兗州事として、なお不安定な兗州の支配確立に盡力した。當該時代の都督の職掌などに關しては、石井仁「都督考」（『東洋史研究』五一—三　一九九二年）を參照。

(8)　中村圭爾「魏晉時代における『望』について」（『中國——社會と文化——』二　一九八七年）は、魏晉時代における「望」の主體が、地域社會の全構成員からなるべきであるという觀念は存在したものの、實際に「望」の擔い手となった者は、地域社會の支配者層であったと理解している。

(9)　渡邉義浩「後漢時代の宦官について」（『史峯』三　一九八九年、『後漢國家の支配と儒教』前揭に改題・補訂のうえ所收）を參照。

(10)　曹操は、「月旦評」で著名な「名士」許劭に人物評價を依頼したが、許劭は曹操を「鄙」と卑しみ評語を與えなかった。業を煮やした曹操は、許劭を脅かして人物評價を強要し「清平の世の姦賊、亂世の英雄」という「目」（人物評語）を入手した（『後漢書』列傳五八　許劭傳）。人物評價による「名士」層への參入については、註(5)所揭渡邉論文を參照。

(11)　袁紹政權の性格およびその構成員に關しては、山崎光洋「後漢時代の汝南の袁氏について」（『立正史學』五三　一九八三年）、「後漢末の河北の狀況について——汝南の袁氏を中心として——」（『立正史學』五七　一九八五年）を參照。

(12)　丹羽兌子「荀彧の生涯——一清流士大夫の生き方をめぐって——」（『名古屋大學文學部二十周年記念論集』名古屋大學文學部　一九六九年）、美川修一「『三國志』——荀彧の死——」（『中國正史の基礎的研究』早稻田大學出版部　一九八四年）。

(13)　張大可「論二荀程郭」（『三國史研究』甘肅人民出版社　一九八八年）は、荀彧の「奇策」を七項目に分類して檢討し、それを戰略の立案・政務の主事・賢才の登用と總括している。

(14)　袁紹勢力の優勢を豫想する者が一般的な中で、荀彧同樣、袁紹に仕えたのち曹操の家臣となった郭嘉は、「道・義・治・度・謀・德・仁・明・文・武」の十點において、曹操が袁紹よりも優れると分析している（『三國志』卷一四　郭嘉傳）。

(15)　孔融に關しては、串田久治「孔融と禰衡」（『愛媛大學法文學部論集』文學科編　一七　一九八四年）、張普「孔融淺論」（『北方論叢』一九八九—二　一九八九年）を參照。また、孔融らのグループを「北海グループ」と括ることは、川勝義雄「シナ中世貴族政治の成立について」（『史林』三三—四　一九五〇年、『六朝貴族制社會の研究』前揭に改題・補訂のうえ所收）が行っている。

(16)　「文化」を「經濟」と同樣に「資本」と捉え、「文化資

本」という概念により差異化・階層化・秩序構成といった社會構成の分析を行うものに、ピエール・ブルデュー著、石井洋二郎譯『ディスタンクシオン〔社會的判斷力批判〕Ⅰ・Ⅱ』（藤原書店　一九九〇年）がある。その内容の紹介としては、宮島喬『文化的再生産の社會學――ブルデュー理論からの展開――』（藤原書店　一九九四年）を參照。

（17）内政の議論としては、田疇の封爵拒否を支持（一一田疇傳、數字は『三國志』の卷數、以下同）、棗祗の屯田制の是非を議論（一六棗祗傳）、日食による元旦の朝會の停止拒否（二一劉劭傳）をしたことが傳わっている。また、曹操から荀彧への手紙は、張繡との戰いの經過（一武帝紀）、官渡からの撤退の相談（一武帝紀）、荊州平定の通知（六劉表傳注引傅子）が殘されている。上奏に關しては、衛覬の關中經營（二一衛覬傳）、趙儼から上書（二三趙儼傳）をめぐる荀彧の對應が記錄されている。

（18）佐久間吉也「曹操の法術主義と校事のいきさつについて」（『東洋史論』四　一九八二年）。また、唐長孺「論曹操法家路線的形成」（『歷史研究』一九七五―一　一九七五年）は、儒家路線の産物である名士に對して、法家路線をとる曹操が支配的地位を獲得するまで鬪爭を行ったとしている。

（19）『藝文類聚』卷五二　治政部上　善政に「魏武帝陳損益表曰、陛下卽祚、復蒙試用、遂受上將之任、統領二州、內參機事、實所不堪。昔韓非閔韓之削弱、不務富國強兵、用賢任能。臣以駑騮（『曹操集』（中華書局　一九五九年）は、「區區に改める」）之質、而當鼎之任、以闇鈍之才、而奉明明之政、顧恩念責、亦臣竭節投命之秋也。謹條邊奉舊訓權時之宜十四事、奏如左、庶以蒸蒸、增明太陽、言不足採。」とあり、曹操が法家韓非の政治を尊重していることが看取できる。「二州を統領」した初平三年頃には、曹操が韓非の政治を理想とする法術主義的政治理念を有していたことを理解できよう。

（20）唐長孺「東漢末期的大姓名士」（『魏晉南北朝史論拾遺』中華書局　一九八三年）。また唐長孺は、荀彧が中心となり潁川の「名士」を曹操集團に加入させたように、袁氏滅亡後に崔琰が中心となって冀州の「名士」を、劉表の滅亡後に韓嵩が中心となって荊州の「名士」を、序列をつけながら曹操集團に加入させたことも指摘している。

（21）『三國志』卷二二　陳羣傳に、「時有薦樂安王模・下邳周逵者、太祖辟之。羣封還教、以爲模・逵穢德、終必敗、太祖不聽。後模・逵皆坐姦宄誅、太祖以謝羣。」とあるように、司空西曹掾として人事を擔當した「名士」陳羣の察擧基準も、曹操とは異なっていた。好並隆司「魏王朝成立過程試論」（『社會科教育　歷史・地理研究論集』一九五七年）は、陳羣を法術的官僚とするが、察擧基準に「德」を掲げる陳羣を法術的とは捉えられまい。しかし、「名士」層のなかで法術的と言われることすらある陳羣の察擧基準にも「德」が掲げられることは、「名士」層の「名聲主義」と曹操の「唯才主義」との相違を明瞭に示している。

（22）王定璋「曹操對謀臣的態度」（『社會科學』一九八六―四　一九八六年）は、曹操が「唯才主義」により賢能の士を求める一方で、自己への敵對者を容赦なく殺害したことを說き、

馬植傑「論曹操的用人及其有關問題」(『蘭州大學學報』社會科學版　一九八八―一　一九八八年、『三國史』人民出版社一九九三年に改題・補訂のうえ所收)は、曹操の人材登用は、敵對者優遇・忠孝の重視・謀臣の策を奪わない・部下の過ちを許す・臣下の反對意見を尊重・適材適所という點において優れていたとする。また、朱子彥「曹操用人政策的再評價」(『人文雜誌』一九八七―五　一九八七年)は、曹操の唯才主義は、後漢末の門閥主義を打破したが、それは戰亂時の權宜の策として遂行されたもので、帝王の典型的な權謀術數主義であったとしている。

(23)　李樂民「崔琰被殺原因考辯――兼論曹操的用人――」(『史學月刊』一九九一―二　一九九一年)は、曹操の「唯才主義」の布告のうち、第一回を當時東曹掾として察擧を掌握していた崔琰・毛玠への警告、第二回を譴責、第三回を彼らに代表される東漢の黨人式の選擧への正式な訣別と捉えている。

(24)　「唯才主義」の發布年およびその前後の動向は、『三國志』卷一　武帝紀に依る。また、吉本・魏諷などの魏への反亂については、註(21)所揭好並論文を參照。

(25)　曹操による「阿黨比周」への批判は、『三國志』卷一　武帝紀「建安十年九月令」に、曹丕による批判は、『意林』卷五所引『典論』に見える。また、曹魏政權における校事官の橫行については、註(18)所揭佐久間論文のほか、官爵藍「三國時代之校事制度」(『大陸雜誌』六―七　一九五三年)があり、科法の尊重については、宮川尙志「三國時代の國家觀念と科法の尊重」(『鎌田博士還曆記念　歷史學論叢』鎌田博士還曆記念會　一九六九年)を參照。

(26)　孔融をめぐる交友關係としては、①李膺(A)・②楊賜(C)・③鄭玄(D)・④彭璆(D)・⑤郎原(D)・⑥太史慈(B)・⑦劉備(E)・⑧蔡邕(E)・⑨禰衡(E)・⑩脂習(E、以上『後漢書』列傳六〇　孔融傳)、⑪鄭益恩(D二五)・⑫楊脩(E五四)・⑬荀悅(E五二)・⑭趙岐(D五四)・⑮王允(C五六)・⑯荀彧(E六〇)・⑰謝該(D七九)・⑱何進(C七〇下)、⑲王脩(D一一)・⑳王朗(E一三)・㉑陳羣(B二二)・㉒孫邵(B四七)・㉓盛憲(E五一)・㉔張紘(E五三)・㉕虞翻(E五七)・㉖徐友(E六一)を揭げうる〔(　)中のA は孔融を評價、Bは孔融が評價、Cは孔融を察擧、Dは孔融が察擧、Eは交友關係を表す。また、⑪～⑱の漢數字は『後漢書』列傳、それ以降は『三國志』の卷數を示す〕。このうち、⑦劉備は敵對國蜀漢の君主であり、㉒～㉖は吳に仕えた「名士」である。

(27)　荀彧の子顗が陳紀の娘を、子粲が曹洪の娘を娶り、娘は陳羣と結婚している。また、荀爽の孫盼が鍾繇の娘を、荀彧の孫冀が司馬懿の娘を娶っており(『三國志』卷一〇　荀彧傳)、荀氏は曹氏・陳氏・鍾氏・司馬氏と婚姻關係を有していた。

(28)　荀攸が九錫勸進文の筆頭となり、魏國建設後尙書令として人事を掌握したことは『三國志』卷一　武帝紀注引『魏書』、『魏氏春秋』を參照。また、陳羣が漢魏の禪讓に舊漢臣として喜びがたい感情を抱いたことは、『三國志』卷一三　華歆傳注引『譜敍』に傳えられ、司馬懿が曹操に警戒されて樞要

な地位に就けなかったことは、『晉書』巻一　宣帝紀を參照。

(29) 本稿で使用する「文學」という概念は、現代使用されている文學とは異なり、その内容に儒教の影響を色濃く受けた當該時期固有の「文學」を指している。したがって、當時の「文學」は、現代の感覚からすれば、「儒教」對「文學」という形に截然と二極分化しうるものではないが、當該時期の曹操には、「儒教」の殻を打ち破り、新たなる「文學」を形成しようとする意識があったと考えている。

(30) 鈴木修次『漢魏詩の研究』（大修館書店　一九六七年）。

(31) 以上のような鈴木の理解に對して、中川薫「『建安文學』の主流と、その、文學史上に占める時代區畫〃について。」（『鳥取大學學藝學部研究報告』人文科學　三　一九五二年）は、「建安文學」の時期を建安・黄初・太和を一貫する悲觀的享樂主義の詩の時代と廣く捉え、松本幸男「建安詩壇の形成過程について（一）～（四）」（『立命館文學』一八四、一八六、一八八、一八九　一九六〇、一九六一年）は、「建安文學」における曹操の位置を輕視し、曹丕・曹植を中心者と位置づけている。また、孫明君『漢末士風與建安詩風』（文津出版社　一九九五年）も參照。

(32) 井波律子「曹操論」（『中國文學報』二三　一九七二年）。

(33) 竹田晃「人間曹操の一側面――その詩を手懸りとして――」（『人文科學科紀要』國文學・漢文學　一六　一九七二年）。

(34) 岡村繁「建安文壇への視角」（『中國中世文學研究』五　一九六六年）。

(35) 吉川幸次郎「三國志實錄　曹氏父子傳」（『世界』一九五六―一～一二　一九五六年、『吉川幸次郎全集』七　三國六朝篇　筑摩書房　一九六八年　所收）。

(36) 渡邊義浩「『德治』から『寛治』へ」（『中國史における教と國家』雄山閣出版　一九九四年、『後漢國家の支配と儒教』前掲に改題・補訂のうえ所收）。

(37) 西嶋定生「魏の屯田制――特にその廢止問題をめぐって――」（『東洋文化研究所紀要』一〇　一九五六年、『中國經濟史研究』東京大學出版會　一九六六年　所收）、藤家禮之助「曹魏の屯田制」（『早稲田大學大學院文學研究科紀要』八　一九六二年、『漢三國兩晉南朝の田制と稅制』東海大學出版會　一九八九年　所收）などを參照。

(38) 傅可航「吳蜀文學不興的社會原因探討」（『社會科學研究』一九八六―二　一九八六年）は、蜀漢・孫吳で文學が不振であった理由を、統治者が愛好・宣揚しなかったことに加え、文學觀念が進歩せず、政治・經濟的餘裕もなかったことに求めている。

(39) 伊藤正文『曹植』（岩波書店　一九五八年）は、曹操の文學者に對する態度は、從來の君主が文學者を役者や藝人なみに取り扱うのとは全く違い、殆ど平等の資格で交際したとする。また、岡村繁「曹丕の『典論論文』について」（『支那學研究』二四・二五　一九六〇年）は、『典論』で説かれる文章不朽論を、純文學ではなく纏まった一家言的思想書の不朽を言ったものであるとする。これに對して、山口爲廣「典論論文攷」（『漢文學會會報』二〇　一九七五年）は、辭賦など

の文學の價値が政治から獨立していたことを說き、文脈のなかで文學の重要性が說かれているとしている。

(40) 福井佳夫「曹丕の『與吳質書』について——六朝文學との關連——」(『中國中世文學研究』二〇　一九九一年)は、「與吳質書」の特徵を文學批判・文雅の遊びへの懷古・身分を越えた連帶感・文人の死を仲間意識で悼むことに求める。また、文學評論に關しては、林田愼之助『中國中世文學評論史』(創文社　一九七九年)を參照。

(41) 萬繩楠「曹魏政治派別的分野及其升降」(『歷史教學』一九六四—一　一九六四年)。

(42) 曹植の文學と政治との關わりについては、景蜀慧『魏晉詩人與政治』(文津出版社　一九九一年)を參照。

(43) 曹道衡「從魏國政權看曹丕曹植之爭」(『遼寧大學學報』一九八四—三　一九八四年)は、魏の支配階層が曹丕を支持したため、曹操は寵愛する曹植を太子にできなかったとする。

(44) 吳質は「名士」層からの閉め出しにより、曹丕の寵愛にも拘らず、長らく地方官に止まっていた(『三國志』卷二一王粲傳)。また、崔琰の從弟崔林と對立し、曹丕の寵愛を背景にこれを左遷させると、「清論」は多く崔林のために吳質を恨んだという(『三國志』卷二四　崔林傳)。「清論」という「名士」層の輿論が、曹丕の寵愛を背景に權力を行使する吳質への批判に向けられていることが理解できる。こうして魏の「名士」層から閉め出された吳質には、孫吳政權に降伏するというデマまで流され、孫吳では吳質の降伏文を胡綜が偽作している(『三國志』卷六二　胡綜傳)。「名士」層の排他的な仲間社會が、「文學」という新たな價値基準を排斥している姿を窺うことができよう。また、註(34)所揭岡村論文は、建安文壇の主體は敵國からの參入者か、吳質が「單家」出身であるように、家柄の低い者であったとしている。「名士」層との對峙性が、出自や經歷からも明らかとなろう。なお、吳質の經歷については、松本幸男「曹丕と吳質——曹丕の評論活動の契機——」(『立命館文學』三五八・三五九　一九七五年)を參照。

(45) 曹丕の『典論』が、文學の獨立宣言などではないことについては、註(39)所揭岡村論文を參照。また、王夢鷗「從典論殘篇看曹丕嗣位之爭」(『中央研究院歷史語言研究所集刊』五一—一　一九八〇年)は、『典論』が長男の立太子を主張し、曹植への諷刺のために書かれたものであるとし、そのなかで「文學」の價値が貶められているのも、曹植の文學的才能を曹操に重視させないためであったとする。あるいは、註(15)所揭張普論文は、曹丕が生存年のずれる孔融を「建安の七子」に加えた理由を「名士」層への籠絡に求めている。

(46) 漢魏の禪讓については、宮川尙志「禪讓による王朝革命の特質」(『東方學』一〇　一九五五年、『六朝史研究　政治・社會篇』日本學術振興會　一九五六年に改題のうえ所收)を參照。また、禪讓の際の儒教理念に關しては、南澤良彦「王肅の政治思想——「感生帝說」批判の背景——」(『中國思想史研究』一〇　一九八七年)を參照。

(47) 川合安「九品官人法創設の背景について」(『古代文化』四七—六　一九九五年)は、九品官人法創設をめぐる研究史

を整理し、曹操の人事政策は、實務重視の「唯才主義」一邊倒ではなく、名士の意向をも配慮していたとする。

(48) 本田濟「魏晉時代の選擧と法」(『人文研究』八―七　一九五七年、『東洋思想研究』創文社　一九八七年　所收)は、夏侯玄は、君主のみが把るべき權力の下移、善行を飾り虛名を賣る弊害を批判したと理解する。また、夏侯玄が曹爽政權の中核であったことは、伊藤敏雄「正始の政變をめぐって――曹爽政權の人的構成を中心に――」(『中國史における亂の構圖』雄山閣出版　一九八六年)、葭森健介「魏晉革命前夜の政界――曹爽政權と州大中正設置問題――」(『史學雜誌』九五―一　一九八六年)、松本幸男「夏侯玄と曹爽政權――正始の論壇の一考察――」(『立命館文學』三八六～三九〇　一九七七年)などを參照。

(49) 佐藤達郎「曹魏文・明帝期の政界と名族層の動向――陳羣・司馬懿を中心に――」(『東洋史研究』五二―一　一九九三年)は、曹操の「人才主義」は名族層に對する一方的抑壓ではなく、崔琰・荀彧・陳羣らの「人才主義」の積極的な利用であるとし、初期の九品官人法に見られる「人才主義」も同樣の意圖を持っていたとしている。曹操と「名士」層の「人才主義」を同質と捉える點で、本稿とは視角を異にする。また、狩野直禎「陳羣傳試論」(『東洋史研究』二五―四　一九六七年)は、九品官人法の資格審査が、反曹丕派に及ぶことを主張している。

(50) 神矢法子「魏前期の人才主義」(『九州大學東洋史論集』三　一九七四年)は、こうした九品官人法と「唯才主義」との斷層を魏の皇帝のとる人才主義、具體的には尚書吏部曹の銓衡手續きが埋めようとしたと主張する。また、註(47)所揭川合論文は、九品官人法を曹操からの政策の繼承と捉える唐長孺・楊德炳・張旭華・陳長琦、「唯才主義」からの轉換と捉える李則芬・何茲全・萬繩楠の說を紹介している。

(51) 下見隆雄『儒教社會と母性――母性の威力の觀點でみる漢魏晉中國女性史――』(研文出版　一九九四年)を參照。

(52) 唐代の科擧における文學の重要性については、程千帆著、松岡榮志・町田隆吉譯『唐代の科擧と文學』(凱風社　一九八六年)を參照。

THE POLITICAL ENHANCEMENT OF "LITERATURE" IN THE THREE KINGDOMS PERIOD
—From the Viewpoint of the Formative History of the Six Dynasties Aristocracy—

WATANABE Yoshihiro

The Ming Shi 名士 class, comprising the intellectuals of the late Later Han and the Three Kingdoms period, maintained social authority by monopolizing cultural values. Among these cultural values, the ability to secure information through colleague societies, political factions that were based on the analysis of information, and the ability to stabilize political power by gaining the support of Haozu 豪族, were able to coexist with monarchical power. However, the close comradeship that characterized the societies of the Ming Shi class, and their evaluation of a person and claim to hold exclusive possession of Confucian values, gave rise to conflicts with monarchical power. When Cao Cao 曹操 developed a powerful adversary in the person of Yuan Shao 袁紹 and needed the unqualified support of the Ming Shi, the intimate relationship between Cao Cao and Xun Yu 荀彧 could continue as Xun Yu was the representative of the Ming Shi class and their purposes coincided. A conflict arose, however, when Cao Cao attempted to establish monarchical rights, monopolized the right of personnel management and Fa-shu zhu-yi 法術主義, and acted against Confucian values by enhancing "literature" with the overthrow of Yuan Shao. The collapse of their relationship was decided by Cao Cao's installation as Wei-gong 魏公. Cao Cao established "literature" as a new standard of cultural values, to replace the priority of the concept of the "Confucian state" that had served as the center of values during the Later Han. Compared to the concept of the Confucian state, the concept of "literature" is a cultural value that embodies more prominent subjective factors. Therefore the concept of "literature" as a central cultural value was effective as a new standard of cultural value to be used in opposition to the Ming Shi class, who formed colleague societies based on Confucian

values. However, the colleague society of the Ming Shi was firm, and as Cao Pi 曹丕 struggled for leadership position against the literarily talented Cao Zhi 曹植, Cao Pi gradually began to regain respect for Confucian values. Moreover, the fact that Cao Pi's sovereignty was justified by Confucian values made clear the superior position of Confucian values over "literature". As a consequence, Confucian values were used as a standard of promotion for talented members in the Jiu-pin Guan-ren-fa 九品官人法, which was established in the period of change from Han 漢 to Wei 魏. Thus, the colleague societies of the Ming Shi class came to form an aristocracy supported by Confucian values.

THE REBELLION OF TANG YU-ZHI 唐寓之 AND THE SHIDAFU 士大夫

KAWAI Yasushi

Most previous studies of the Tang Yu-zhi Rebellion, which occurred on the west coast of Zhejiang 浙江 in 485 A. D., have focused on the question of whether or not this can be considered as a rebellion of the peasantry. However, it is the opinion of this author that a group of sailors and merchants formed the core of this rebellion. At that time, the Nan-Qi Wu-di 南齊武帝 government, in an effort to secure a sound financial basis, had carried out a close census of taxpayers and had increased the circulation taxes. The great increase in circulation taxes may have placed a heavy burden on sailors and merchants, who had been omitted from the census. Although forming the rearguard rather than the vanguard, peasants and wealthy farmers who were discontented with the close census also took part in the rebellion, swelling the rebel army from 400 to 30, 000 persons. This rebellion was suppressed by the Imperial Guards, however, the Nan-Qi Wu-di government, which was under the control of the emperor's favorites, was opposed to the Shidafu faction, which included some Imperial princes and officials, on the issue of measures devised to deal with this rebellion. Even in the period before this rebellion, the Shidafu had